

中学校1年生における進路適性検査を用いた進路指導

—小学校から中学校への移行期における職業観をめぐって—

萩生田 伸 子 埼玉大学教育学部 心理・教育実践学講座
堀 田 香 織 埼玉大学教育学部 心理・教育実践学講座

キーワード：進路調査、適性、職業選択

1. はじめに

近年、フリーターやニートの増加とともに、キャリア教育の重要性が不可欠とされる時代になった。以前は社会に出て精神的にも経済的にも独り立ちすることを目指していた大学生が、社会に出ることを恐れ、親の経済的援助のもとで生活し続けることを望むようになった。大人になること、責任を負うこと、社会人として評価されること、自由をはく奪されること、「今の生活」を失うことを恐れるようになった。以前であれば「モラトリアム」という猶予期間として位置づけられてきた「フリーター」や「ニート」も高齢化が指摘され、期間限定に猶予期間ではなく、アイデンティティ発達の終着点の一つの形になりつつある。これらの現象は「アイデンティティの未発達」「自己決定能力や自己効力感の低下」あるいは「動機づけの問題」としてとらえられ、検討されてきた(萩原・櫻井2008)。そして、これらの心理的問題の根は深く、現代社会の中で育つ子どものごく早期からの課題として社会で取り組まねばならないという見解が一般的なものとなり、学校教育の場では、小学校段階から生きる力を育み、働くことの意味を見出す教育が求められるようになった。こうして、学校教育の場に「キャリア教育」という言葉が登場することとなった。

1-1 キャリア教育と発達段階

キャリア教育は小学校段階から始まり、中学校、高校へと発達に応じた教育が構築されている。国立教育政策研究所生徒指導研究センター(2002)によれば、小学校段階は、「進路の探索・選択にかかる基盤形成の時期」であり、「自己および他者への積極的関心の形成・発展」「身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上」「夢や希望、憧れる自己イメージの獲得」「勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の形成」とされている。具体的には、社会科で地域を探索し、多様な職業を学ぶ学習や、自分の将来の夢についての作文課題などが行われている。中学校段階は、より「現実的探索と暫定的選択の時期」とされ、「肯定的自己理解と自己有用感の獲得」「興味・関心等に基づく職業観、勤労観の形成」「進路計画の立案と暫定的選択」「生き方や進路に関する現実的探索」が課題とされている。具体的には、職業体験が中学に位置づけられ、体験的に職業について、「働くこと」について考える機会となる。また中学生は第二次性徴とともに、自意識が高まり、自分らしさ、自己の存在意義などを自分に目を向けることが増える。そのような時期にあつて、キャリア教育は単に職業選択の問題ではなく、自分がどのように生きていくかを自問自答しながらアイデンティティを模索していく時期であるともいえる。つまり、自分らしい生き方を模索することと、社会で何のために、どのような職業に就くかということが車の両輪のように発達してい

く時期であると言える。

さらに、高校段階になると、現実的探索に「試行」が加わり、社会的移行準備の段階となり、「自己理解の進化と自己受容」「選択基準としての職業観・勤労観の確立」「将来設計の立案と社会的移行の準備」「進路の現実吟味と試行的参加」が課題となる。

1-2 職業観・勤労観の形成

こうした、発達段階を見てみると、職業観・勤労観について、中学校段階で興味、関心等に基づく職業観、勤労観を形成した後、高校で、選択基準としての職業観、勤労観を確立する。従って、中学段階で自らの興味関心を膨らまし、それにより職業観や勤労観を育成しておくことは重要な課題となる。

職業観について、島袋（2009）は職業観と勤労観という概念を整理して、三村（2007）の定義を以下のように紹介している。それによれば、職業観とは「職業についての理解や考え方と職業に就こうとする態度・および職業をとおして果たす役割の意味やその内容についての考え方」であり、勤労観とは「『日常生活の中』での役割の理解や考え方と役割を果たそうとする態度、および役割を果たす意味やその内容についての考え方（価値観）である。

國眼・松下・苗田（2013）は中学生を対象に職業体験学習の事前学習の一環として、「人生観」と「職業観」について調査した。「職業観」については、「仕事を選ぶときに大切したいもの」について、「自立」「資格」「仕事の内容」「自分の成長」など27枚のカードから5枚選択させ、さらに重要度順に順位付けをし、自由選択理由を記述させた。結果として、一度でも選択されたカードは「収入」60.2%、「楽しい」49.4%、「安定性」42.2%、「やりがい」31.5%。「人間関係」30.7%、「仕事内容」30.3%であった。反対に「自立」は27項目中22項目と重要視されていなかった。國眼らは職業体験学習によって、これらがどのように変化するかを調べようと試みている。職業観を成長させることは進路指導・進路相談においても重要な目標の一つである。

1-3 進路適性検査とは

さて、生徒個人の職業観・勤労観の形成とともに、興味や特性が実際の進路と適合することは職業選択にとって重要な一つの指標となる。しかし、中学段階ではどのような職業が存在するかについての知識が多くはないし、また、自らの興味や特性についての自己認識も揺れ動きやすいので、進路と適合するとは限らない。アセスメントの一つのツールとして使われるのが職業適性検査である。

職業適性検査とは個人の能力、興味、性格などを把握し、多様な職業との適性をみようというものである。例えば、厚生労働省偏一般職業適性検査は個人の能力を9つの適性能（知的能力、言語能力、数理能力、書記的知覚、空間判断力、形態知覚、運動共応、指先の器用さ、手腕の器用さ）の視点から測定し、職業との適性をみようとするものである。中学生についていうならば、どのような教科が得意であるかも一つの指標となる。一方、個人の興味関心から職業の適性をみようとする検査は、職業興味検査とも称されている。例えば、大学生を対象とするVIP職業興味検査はその代表的なものである。これは160の具体的な職業名に対する興味・関心の有無から、6つの職業興味領域（現実的、研究的、社会的、習慣的、企業的、芸術的）に対する興味の程度、および5つの心理的傾向（自己統制、男性一女性、地位志向、稀有反応、黙従反応）の強さを測定するものである（堀田 1992）。職業決定においては、まず自分自身がどのような興味関心を持つ

ているのか、そして、それがつながる職業にはどのようなものがあるのかを知ることが最初のステップとなる。すなわち、各学校段階において自らの興味関心を把握する機会を持つことは重要であり、この目的のために様々な職業適性検査・興味検査がそれぞれの発達段階に応じて作成されている。「進路クラブ」は中学生を対象に作成された進路適性調査のための検査であり、職業観のほかに、興味関心、性格、得意教科から、適性を探ろうとする検査で、その他にも、進路の希望、進路の希望、学習状況、悩み、親の希望など様々側面をとらえ、進路指導・進路相談に役立てることが考えられている。

本研究はこの進路クラブを中学1年時に実行し進路指導に活かしている中学校の協力の下、進路クラブの結果を検討したものである。

1-4 本研究の目的

本研究は中学1年生を対象にこの進路クラブを実施し進路指導に活かしている中学を対象に行うものである。中学1年生という小学校から中学校への過渡期において、進路適性検査を行うことは、生徒の進路希望や興味を教師が把握し進路指導に活用するだけではなく、生徒自らが自身の特徴を把握し、進路決定への動機づけになると考えられる。ここでは、中学1年生がどのような興味関心、職業観などを抱いているかという実態を、既存のデータを再分析することによって明らかにするとともに、職業観に関連する要因を探り、進路指導・進路相談に利用可能な視点の抽出を試みるものである。

2. 方法

調査対象者：A中学校の1年生4クラスを対象として調査が行われた。このうち3クラス132名(男性66名、女性66名)を分析対象とした。

調査時期：2015年7月。

データの概要：分析対象のデータは日本文化科学社発行の「中学校用 学年別進路適性調査 進路クラブ」に対する回答である。これは進路指導の一環として生徒に関する資料収集を目的として行われたものである。当該調査において設問の提示は冊子により、回答はマークシート形式であった。調査内容は希望職種、進路の希望、得意科目、性格特性など進路選択に関わるものの他、生活上の悩み事などに関する項目も含まれている。それらについてA中学校校長の許可を得て分析を行った。なお、本稿で取り上げるのはテスト業者が整理した後のデータであり個人を識別する情報は含まれていない。また、個々の回答内容についても含まれていない情報がある。例えば性格特性を把握すると思われる項目群は64あるが、分析対象とすることが可能なのは64項目を8つのパーソナリティ特性の高低に集約した後のものである。欠測については分析の都度、除外した。

3. 結果と考察

3-1 基本的な特徴

(1) 得意科目等

1番目の得意科目として最も多く挙げられたのは数学であり29.5%が選択している。ついで国語が26.5%、社会が18.9%、音楽が9.8%、理科が8.3%となっている。ただし、質問内容および

方法が「得意科目か、得意科目がない場合はこれから頑張りたい科目」を3つまで選択するという形式であったため、実際に得意科目なのか苦手だけれど頑張ろうと思っている科目なのかは不明である。なお、前述のとおり3科目までを選択できる形式であったため延べの選択回数を調べたところ、数学56回、英語50回、音楽47回という順になったことを付記しておく（図1）。

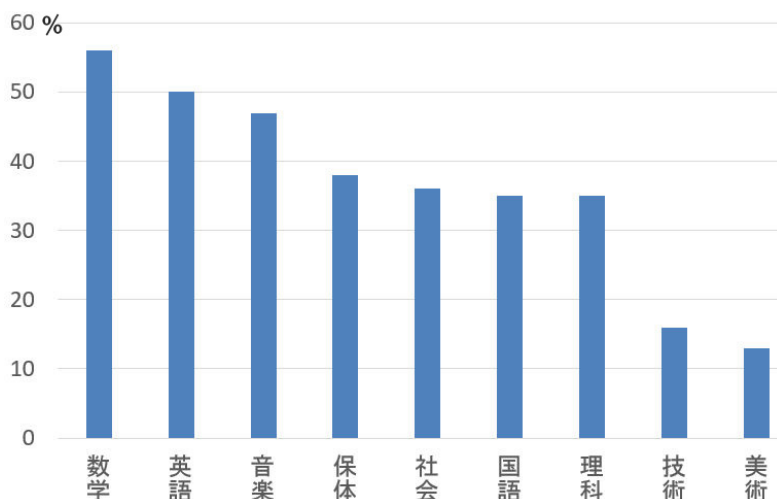


図1 得意（頑張りたい）科目

(2) 生活の状況

家庭学習の時間数については「ほとんどしていない」「30分以内」「30分～1時間くらい」「1時間～2時間くらい」「2時間以上」の中から一つ選択する回答形式となっていた。最も選択されたのは「1時間～2時間くらい」であり46.2%であった。ついで「2時間以上」が30.3%に選択されている。他方「ほとんどしていない」を選んだ者は3.1%であることから、全体としては家庭でも学習をする習慣身についていると考えられる。

一週間あたりの学習塾へ通う回数は「3～4回」が48.5%と最多を占めた。通っていないと回答した者は15.2%である。

学習意欲についてはふつうと答えた者が66.7%で最多である。いやいや取り組んでいると回答した者は0.8%、あまりやる気がないと回答した者が11.4%であり、全体的には学習意欲が低い者は少ないと考えられる（図2a）。

部活動に対しては、そもそも参加していない者は4.5%であった。積極的に取り組んでいると回答した者は71.2%であり、大多数を占めた（図2b）。課外活動に対する意欲の高さがうかがわれる。

(3) 中学卒業後の進路

本人が中学卒業後にどのような進路を希望しているか、および家族の希望はどのようなものであるかについて、「高校を卒業後、大学・短大」「高校を卒業後、専門学校」「高校卒業後は未定」「高校卒業後は就職／家業手伝い」「中学卒業後は就職／家業手伝い」「上記以外」「中学卒業後は未定」の7つの選択肢から1つを選択する形式で質問している。

本人の希望、家族の希望とも「高校を卒業後、大学・短大」が最多であり、それぞれ73.3%、85.6%であり、本人よりも家族の方が大学・短大まで進学して欲しいと希望している（図3）。これは調査担当業者の示す全国平均と比較しても高い比率となっている。逆に「中学卒業後は未定」の者はそ本人1.5%、家族3.0%と少数であることから、中学一年生の一学期の段階から、進路に関して何らかの意識をしていることがうかがわれるが、未定の者については、進路の明確化が可

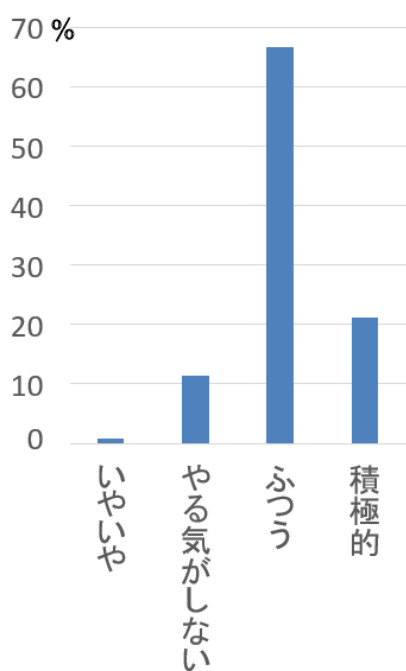


図2a 学習意欲

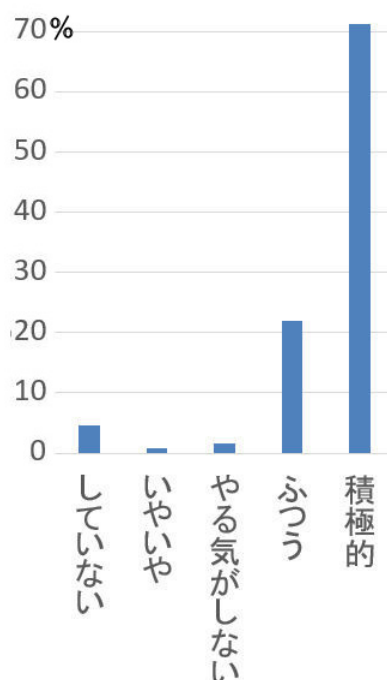


図2b 部活動への参加

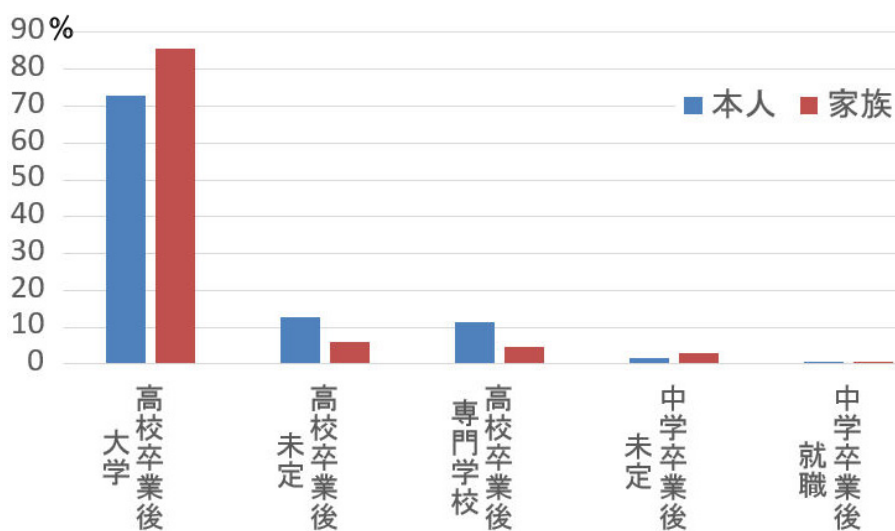


図3 中学卒業後の進路希望

能となるような進路指導が必要であるかもしれない。これは高校進学後の進路は未定という回答をした者についても同様であろう。『とりあえず高校に行く』だけでなく、その先の展望を持てるような指導が求められているかもしれない。また、家族の希望は未定と回答した者は、家族と将来の進路等について話し合っていない可能性も考えられるため、家族を含めて進路について考える機会を設けるといった働きかけが必要となるかもしれない。

本人の希望と家族の希望との間における食い違いは、「大学・短大」への進学希望か「専門学校」への進学希望かが大部分を占めており、高校進学後、さらに進学するという基本的な方向性は一致していると言える。生徒・家族の一方が「就職」、他方が「進学」を希望するという形での意見の食い違いは2ケースのみ見られた。全体の中では少数であるとはいえ、進学するか就職するか

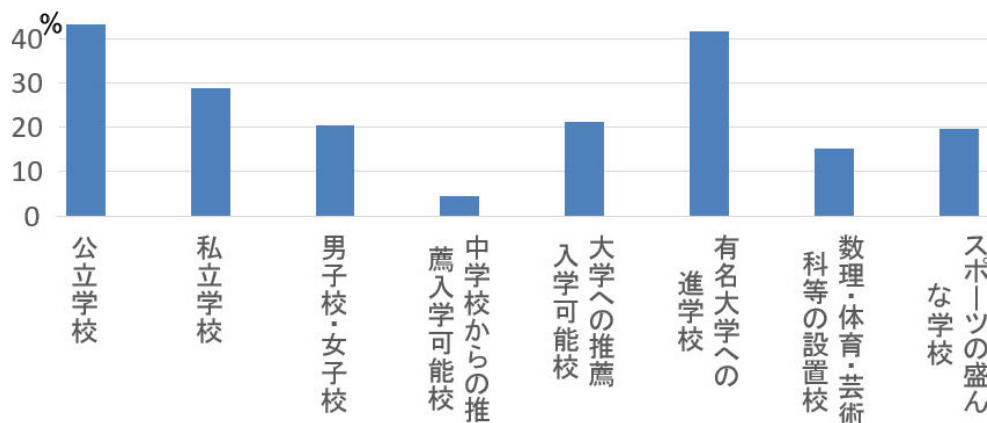


図4 進学したい高校のタイプ

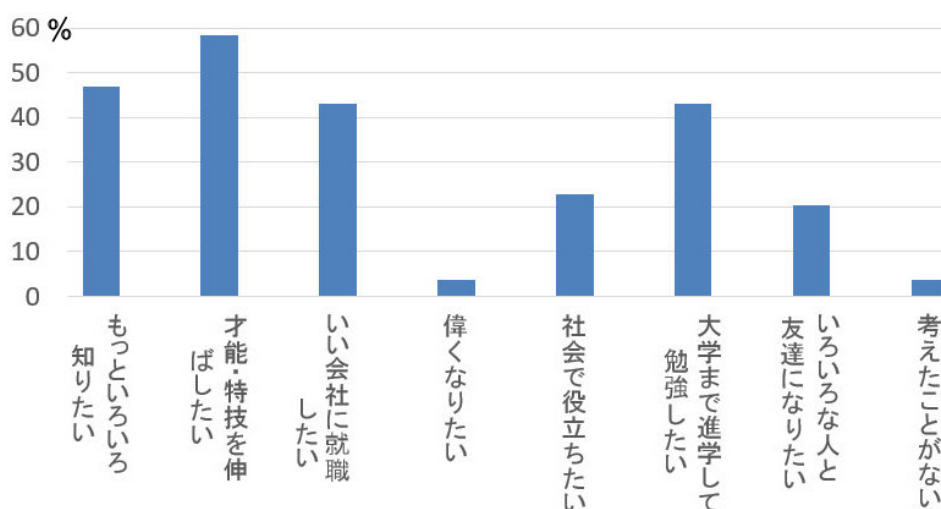


図5 高校への進学理由

というのはその後の人生に大きな影響を与えうる。教員は三者面談等において両者の意見を尊重しつつ、よりよい意思決定が行われるような支援をおこなっていくことが大切であると考えられる。

(4) 進学したい高校のタイプ

どのような高校に進学したいかについて、「公立の学校」「私立の学校」「男子校または女子校」「中学校からの推薦入学制度（ふつうの入学試験を受けなくてもよい）のある学校」「大学への推薦入学制度のある学校（大学の附属高校など）」「有名大学への多くの合格者を出す学校」「理数・体育・音楽など、特別な学科のある学校」「スポーツのさかんな学校」「その他」の9つの選択肢から3つまでを選ぶ形式で回答を求めている。

「公立の学校」は43.2%、「有名大学への多くの合格者を出す学校」は41.7%の生徒が選択している。後者は大学への進学希望者が多いことと一貫した結果となっている（図5）。さらに特徴的なのは20.5%の生徒が「男子校または女子校」を選んでいることであり、調査担当業者の示す全国平均と比較しても高い比率となっている。これはA中学校の近隣に有力な進学校が存在し、それらの中には男子高校・女子高校があるため具体的な高校を意識した回答となっているためであるかもしれない。逆に「中学校からの推薦入学制度のある学校」は4.5%のみが選択をしている。

選択肢相互の関係としては、「大学への推薦入学制度のある学校」を選択した生徒は「公立の学

校」「有名大学への多くの合格者を出す学校」「男子校または女子校」を選ばない傾向が見られた。他方、「公立の学校」と「私立の学校」の間には特別な関係はみられなかった。すなわち「公立」を選ぶ／選ばないと「私立」を選ぶ／選ばないについては独立である。近隣の進学校を進路先として意識しつつも、決定にまでは至らない段階であるのかもしれない。

(5) 高校進学理由

どのような理由で高校へ進学するのかについては、「もっといろいろなことが知りたいから」「自分の才能・特技を伸ばしたいから」「いい会社に就職したから」「偉くなりたいから」「社会で役立ちたいから」「大学まで進学して勉強したいから」「いろいろな人と友達になりたいから」「何のために行くのかあまり考えたことがない」「その他」の9つの選択肢から3つまでを選ぶ形式で回答を求めている。

選択率が最も高かったのは「自分の才能・特技を伸ばしたいから」の58.3%であり、ついで「もっといろいろなことが知りたいから」が47.0%、「いい会社に就職したから」と「大学まで進学して勉強したいから」が43.2%であった。逆に、「偉くなりたいから」と「何のために行くのかあまり考えたことがない」は3.8%の生徒のみが選択をしている。自己実現的な目的のほか、実利追求的な目的を挙げる傾向がみられた。

選択肢相互の関係としては「いい会社に就職したから」を選択した者は「大学まで進学して勉強したいから」を選ばない傾向がみられた。

もともと選択回数が少ない「何のために行くのかあまり考えたことがない」を選んだ者は「もっといろいろなことが知りたいから」「自分の才能・特技を伸ばしたいから」を選ばない傾向がみられたが、項目の内容上当然であるかもしれない。

(6) 仕事を選ぶ際に大切に思うこと

将来の職業を選択するにあたり何を重視するかについて、「自分の興味や性格、能力が活かせること」「社会や人の役に立つこと」「お金がたくさんもらえて豊かな生活ができること」「やりがいや生きがいを感じる」「平凡でも安定していること」「周りの人たちから好かれたり尊敬されたりすること」「その他」の7つの選択肢から3つまでを選形式で回答を求めている。

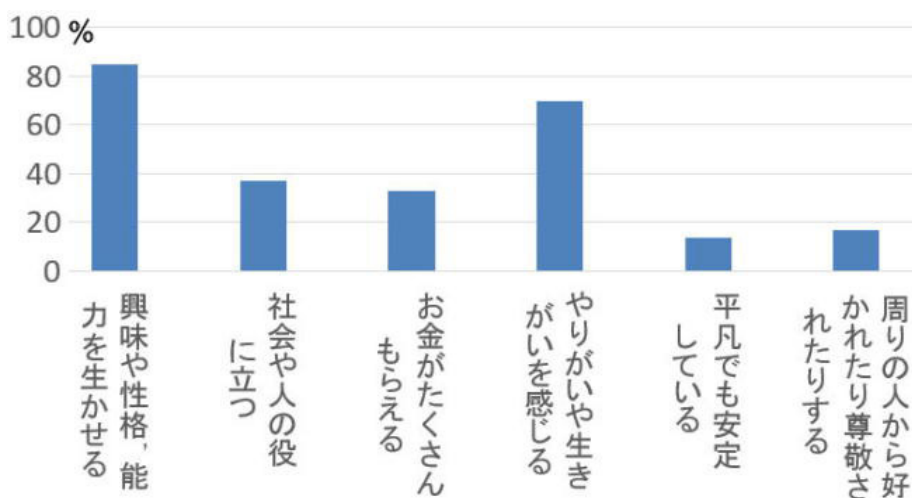


図6 仕事を選ぶ上で重視すること

最も選択されたのは「自分の興味や性格、能力が活かせること」であり84.8%の生徒が選んでいる（図4）。ついで「やりがいや生きがいを感じられること」は69.7%が選んでいる。他方、「平凡でも安定していること」は13.6%、「周りの人たちから好かれたり尊敬されたりすること」は17.4%の生徒にしか選ばれていない。職業については個性を生かし、やりがいを感じられることを求める一方で、他者からの評価や安定、金銭的側面はそれほど重視していない様子が見られる。

選択肢相互の関係としては、「お金がたくさんもらえて豊かな生活ができること」を選ぶ生徒は「自分の興味や性格、能力が活かせること」「社会や人の役に立つこと」を選ばない傾向、「やりがいや生きがいを感じられること」を選ぶ生徒は「平凡でも安定していること」「周りの人たちから好かれたり尊敬されたりすること」を選ばない傾向などが見られた。

(7) してみたい仕事

将来業どのような職業につきたいかに関しては「専門・技術」「芸能・マスコミ」「事務」「営業・販売」「サービス」「保安」「戸外」「交通機関」という8つの職業分野の中から第一希望、第二希望を選択する形式で回答を求めている。第一希望としてもっとも選択されたのは専門・技術分野で、63.6%の生徒が選んでいる（図7）。この分野として例示されていたのは、研究者、医師、看護師、教員、スポーツ選手などであった。本設問では、職業分野というくくりの中から将来やってみたい仕事を選ぶという設定になっており、また、そのくくり自体が職業の実態とどの程度一致しているのか、生徒がどの程度職業について具体的なイメージを持った上で回答をしたのかは不明であるが、職業に関するアンケートで上位に入る職業のいくつかが例示されていたことが関係しているかもしれない。2番目に多かったのは芸能・マスコミ分野で14.4%が選択をしている。この分野として例示されていたのは俳優、デザイナー、作家、通訳などであった。第二希望としてあげられることが多かったのは事務、芸能・マスコミ、専門・技術分野であった。

なお、「事務」の例として示されていたのは、一般事務員、秘書、受付などであり、「営業・販売」

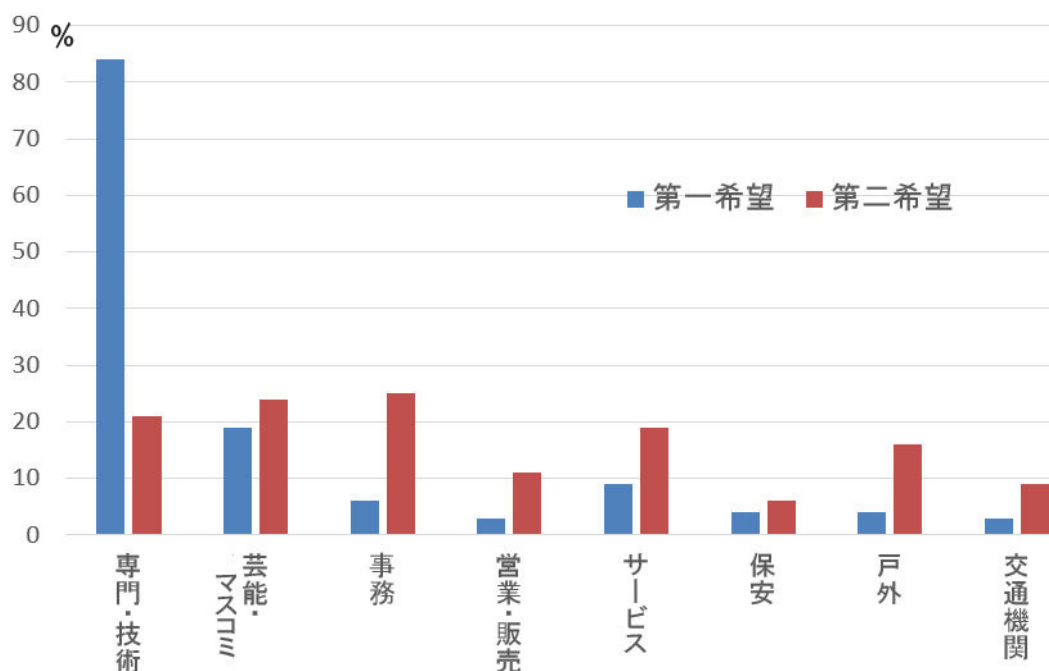


図7 将来してみたい仕事

は自動車販売員、デパート店員、フラワーショップ店員など、「サービス」は旅行・観光ガイド、フライトアテンダント、美容師など、「保安」は警察官、消防官など、「戸外」は動物飼育係、農業、漁業など、「交通機関」は電車・トラック・バス運転手、パイロットなどであった。

3-2 職業選択における生徒のタイプ

「仕事を選ぶ際に大切だと思うこと」は職業選択における生徒の価値感を反映していると考えられる。そこでクラスター分析を用いて「仕事を選ぶ際に大切だと思うこと」の回答パターンに基づいた生徒のタイプ分けをおこなった。クラスタ数を変えることによって多様な分類が可能であるが、ここでは5つのクラスタに分類した結果を採用した。各クラスタの平均的な回答パターンを図8に示す。

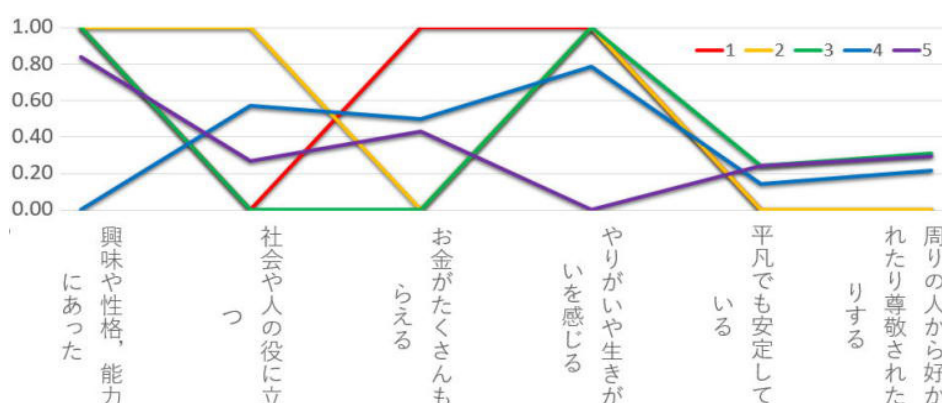


図8 各クラスタの特徴

大まかにいえば第1クラスタはお金がたくさんもらえて、やりがいを重視するが他人の役に立つことは重視しないタイプで15.9%の生徒が分類された。第2クラスタは他の人から評価されずお金がたくさんもらえなくても社会の役に立ちたいタイプで23.5%がこれに該当した。第3クラスタは自分に合っていることとやりがいを求めるタイプで22.0%、第4クラスタは（やりがいはやや重視するが）自分に合っていることを求めないタイプで10.6%、第5クラスタは（自分に合っていることはやや重視するが）やりがいを重視しないタイプであると考えられ、28.0%がこれに該当した。各クラスタの特徴からそれぞれ、タイプ1「収入とやりがい重視型」、タイプ2「社会貢献重視型」、タイプ3「自分らしさとやりがい重視型」、タイプ4「中間型」、タイプ5「やりがい軽視型」と命名可能であろう。

次に、5つのタイプに分類された生徒がそれぞれどのような特徴を示すかについて他の属性などとの関係を検討をおこなった。家庭での学習時間、一週間あたりの通塾回数、学習意欲、部活動に対する意欲などの生徒の生活面に関わる属性との間には特段の関係はみいだされなかった。すなわち、特定タイプの生徒の学習時間が特に長かったり、通塾回数が多かったりといった関係はみられなかった。

次に各タイプに属する生徒がどのような職務内容に対して興味を持っている（と業者が判定した）かについてプロフィール図の形式で図9に示した。

タイプ1「収入とやりがい重視型」の生徒は「奉仕」と「芸術」に対する興味・関心が低い傾向がある一方、タイプ2「社会貢献重視型」の生徒は他者のために尽くす「奉仕」に興味がある。タイプ3「自分らしさとやりがい重視型」の生徒は「事務」に対する興味がないなどの特徴が見

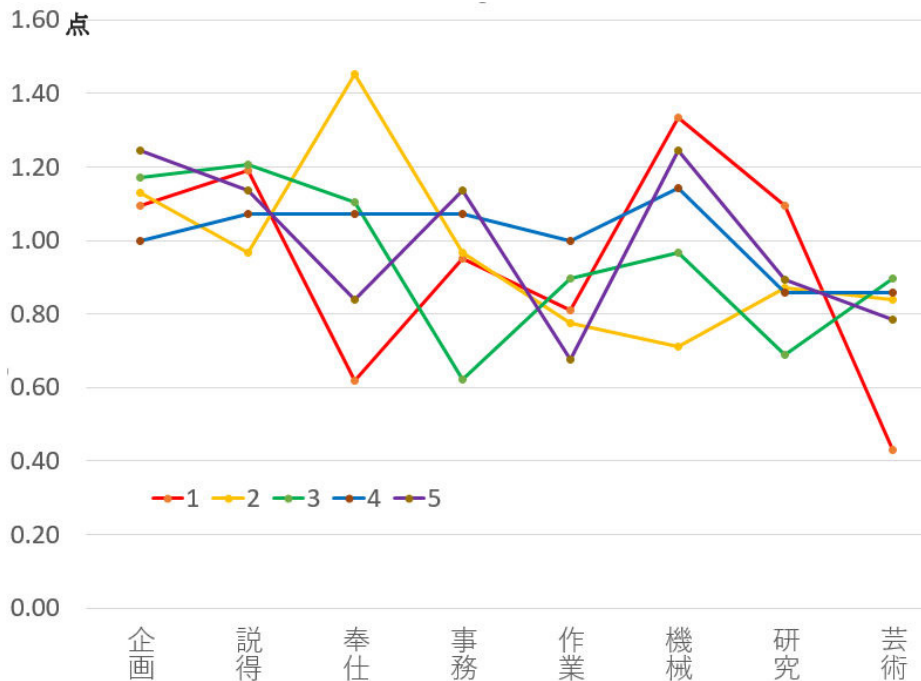


図9 クラスタ別興味のある分野

いだされたタイプ4「中間型」に属する生徒は他のクラスタに属する生徒と比較してどの職務内容に対しても突出した興味・関心を示していないようである。

なお、「仕事を選ぶ際に大切だと思うこと」と仕事の内容や職業分野に対する興味の間には因果的關係というよりはむしろ相関的關係を想定する方が自然であるかもしれないが、ここでは仮に前者を原因的なとらえ方をした記述をしていることを付記しておく。

最後に、業者が判定した適性を生徒のタイプごとにプロフィール図の形式で示したものが図10

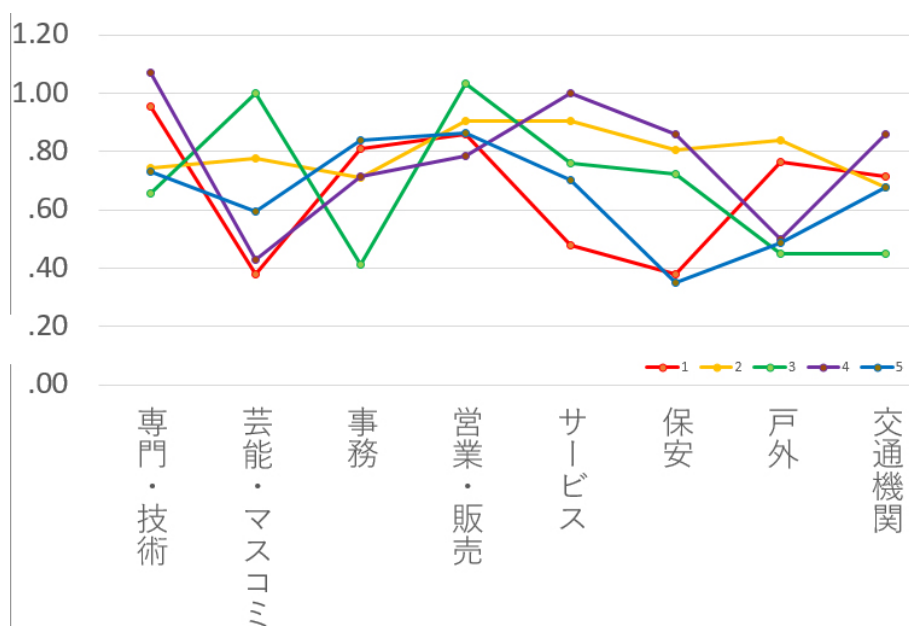


図10 クラスタ別職業適性

である。

タイプ1「収入とやりがい重視型」の生徒は芸能・マスコミと保安で適性が高いとは判定されにくい傾向が見られる。タイプ3「自分らしさとやりがい重視型」では芸能・マスコミでの適性が高いと判定される傾向がある一方、事務では適性が高いとは判定されにくいなど、いくつかの特徴がみられた。しかし、生徒のタイプと職業適性の関係はがはっきりしないものも多い。これは、適性の判定は業者がおこなったものであり、それらはおそらく性格特性や得意科目なども加味した結果であることと関係しているであろう。生徒をタイプ分けする際に性格特性などの情報を用いれば、これとは異なった関係が見いだされる可能性がある。

4. まとめ

本稿では中学1年生を対象とした進路適性調査の回答内容を再分析することにより、進路決定に対する中学生の現状の一端を明らかにした。今回対象となった中学校における学習時間はほぼ平均的であるが、学習塾へ通う回数は高く、学習意欲も高く、同時に部活に積極的に取り組み部活への意欲も高い学校であると言える。将来の進路として、その多くが高校を卒業後大学・短大進学を望んでおり、高等教育への進学についての意識も高いことがうかがわれる。そうした学校自体の特徴が強く出ている側面も見られるとはいえ、中学一年生であつても進路や将来の職業についてある程度考え始めている点は特筆すべきであろう。

次に、本研究では職業観とそのほかの変数との関係を見るために「仕事を選ぶ際に大切だと思うこと」に基づいて生徒を5つのタイプに分類した。それらのタイプを概観するならば、収入を重視するのがタイプ1、社会貢献を重視するのがタイプ2、自分らしさ、つまり自分の興味や能力を生かそうとするのがタイプ3である。タイプ4はそれらの中間タイプであり、タイプ5はやりがいを重視しないタイプである。これらのタイプと学習時間等には特段の関係が見られない一方で、興味を感じる仕事の内容の間にはある一定の関係が存在することも明らかとなった。特に一部の生徒にはこの傾向が顕著に見られ、この点を生かした進路指導をおこなっていくことが必要であると考えられる。その中であつて、数パーセント程度の生徒が、中学卒業後の「進路は未定」と回答したり、あるいは保護者と子どもの進路希望にギャップが存在することが明らかとなった。これらの生徒はまず何らかの形で個別相談に載せていく必要があると考えられる。

職業観については、A中学校では、8割以上の生徒が興味や性格、能力を生かせること、7割近くの生徒がやりがいや生きがいを感じることを重要視しており、先に述べたように自己実現傾向が高いことがうかがわれた。これらの学生は「専門・技術職(研究者、医師、看護婦、教員、スポーツ選手)」を望んでおり、自分の能力にある程度の自信を持ち、その能力を生かして職業人として生かしていくことを前向きに望むことができていることがうかがわれる。

國眼ら(2013)の研究では「仕事を選ぶ時に大切にしたいもの」の第1位が「収入」であり、「楽しい」や「やりがい」を上回っているが、本研究では収入よりも、自己実現を求める傾向が強く、「家庭的なバックグラウンドとして経済的に安定した家族が多く、そうした家庭的基盤のもとに、自らの自己実現を果たそうとしている」とも推測される。

一方で自己実現に比べると、社会的貢献を望む比率は4割弱と半数に満たない。かれらの「やりがいや生きがい」は必ずしも社会貢献にあるとは限らないことが見て取れる。集団への所属意識や他者との関係性が希薄になり、コミュニケーションスキルの低下している現代の特徴が表れ

ているかもしれない。

いずれにせよ、中学1年生の時期にこれらの適性検査を行うことで、自分の傾向を振り返り、自らとは異なる職業観の存在を認識しそれについて考えてみることは重要な点であると思われる。相互に自分が大切にしている職業観について提案し、お互いの相違点を話し合い、相互の違いを知らながら、社会貢献とは何か、収入が高いことで何が得られるか、活かしたい自分とはどのような自分であるかを考えていく心理教育を展開できるだろう。

引用文献

教員免許状更新講習事業コンソーシアム編「教職リニューアル——『教育の最新事情』を効果的に学ぶために」(2009) ミネルヴァ書房

國眼眞理子・松下美知子・苗田敏美(2013)「キャリア発達・教育に関する研究(13)」第55回日本教育心理学会発表論文集 P354.

国立教育政策研究所生徒指導研究センター編 調査報告書「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」(2002) 国立教育政策研究所生徒指導研究センター発行

島袋恒男(2009)「第3章 第2節 進路指導とキャリア教育」梶田叡一・山極隆編著「教育の最新事情」ミネルヴァ書房

萩原俊彦・櫻井茂雄(2008)「“やりたいこと探し”の動機における自己決定性の検討—進路不決断に及ぼす影響の観点から—」教育心理学研究-56, 1-13.

堀田千秋「45 職業興味検査」(1992) 心理臨床大事典改訂版 氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕共編 培風館

(2017年3月31日提出)

(2017年4月17日受理)